

第4章 越前と能・狂言

第4章では、越前と能・狂言の歴史を概観するため、2つの視点を設定しました。1つ目の視点は「越前松平家と能・狂言」です。

徳川家康の次男・結城秀康を藩祖とする福井藩は、江戸時代を通じて転封することなく、越前の地を治めました。そして、慶長8年（1603）、父・家康が征夷大將軍に任じられ、將軍宣下の祝賀能を行ったことが「武家の式楽」の端緒となりました。

資料が限られることから、福井藩での能・狂言の実態については研究途上ですが、本章では福井藩史『国事叢記』の記録を中心に、初代・秀康から江戸時代後期に至る12代・重富の代までの能関連の記録を元に、その特徴を概観しました。また、越前松平家伝来の能面と能装束が初の里帰りを果たしました。

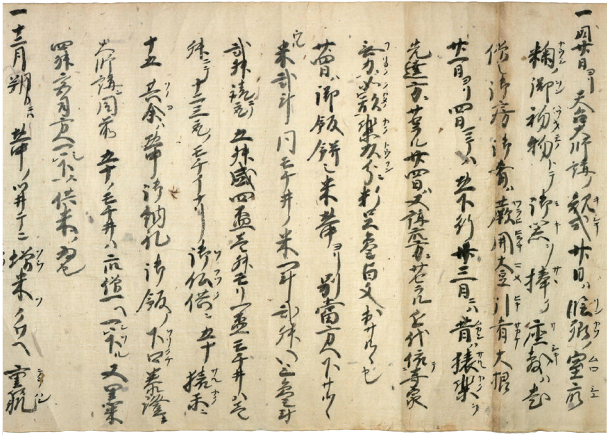


能面 喝食 彦根城博物館
桃山～江戸時代初期・16～17世紀



能装束 紅萌葱茶段流水菊枝模様唐織
江戸時代・17～18世紀 彦根城博物館

2つ目の視点は「越前の猿楽と面」です。能を大成した世阿弥の著した『申楽談義』には、越前出身の面打の名が数多く記され、越前が古くから能面の産地であったことがわかります。その面を用いる越前の猿楽も、古い歴史のあることは当然で、鎌倉時代から南北朝時代には既に隆盛していたようです。戦国時代には、一乗谷の朝倉氏の領内で猿楽役者が養成されたとみられます。そして桃山時代には、江戸時代に幕府の御用を務める世襲面打家、大野出目家と越前出目家の初代を輩出しました。いずれも、北陸の白山信仰の拠点であった平泉寺の僧・三光坊に師事したと伝えられています。本章では、文献史料と合わせて、越前の地に遺された面を通して、越前の猿楽と面の多様さをご紹介します。



福井県指定文化財 越知山年中行事
文明10年・1478年 越知神社



能面 父尉 福井県立美術館
鎌倉～南北朝時代・14世紀

展示解説シート No.181

令和7年10月11日（土）発行

福井市立郷土歴史博物館

〒910-0004 福井市宝永3丁目12-1

電話 (0776) 21-0489 FAX (0776) 21-1489

担当 佐々木佳美

印刷 樹宮本印刷

次の展示

〈企画展〉 史料が語る福井藩と城下町

令和7年11月29日（土）～令和8年2月2日（月）



福井市立郷土歴史博物館

FUKUI City History Museum

展示解説シートNo.181

秋季特別展

能と狂言 ー桃山の遺風ー

はじめに

能楽は現存する最古の演劇と言われ、日本の誇る伝統芸能です。能は、奈良時代に中国から伝わった散楽が、日本の田楽や延年舞、曲舞といった時々の流行の芸能を取り入れて、現在の形へと変化を遂げてきました。室町時代に、観阿弥・世阿弥父子によって現在の能の原型が形づくられました。

江戸幕府を開いた徳川家康は、將軍就任の祝賀能を行ったことで、以降、江戸時代を通じて、將軍宣下や祝儀、饗宴の際の舞楽として振舞われる「武家の式楽」としての能楽の地位が固まりました。

一方、庶民の生活を題材とした狂言は、滑稽なしぐさや言葉の文で得意即妙な笑いを誘う芸ですが、そこには変化を遂げる前の古来の能（猿楽）の要素が遺されているとも言います。

越前は、この能楽で用いられる能面の産地としてつとに知られます。江戸時代には世襲面打家の越前出目家、大野出目家を輩出し、日本各地に残る能面には、その作が多く見出されます。

本展では、岡山市・林原美術館の能楽コレクションから、桃山時代のたいへん稀少な能装束を中心に、能・狂言の精華を展覧いたします。また、越前ゆかりの能面や猿楽の歴史を通して、土地の歴史を振り返る機会としていただければ幸いです。

第1章 桃山の装束

備前池田家の什宝を継承した岡山市・林原美術館には、能装束・能面・能道具の一大コレクションが収蔵されています。これらの能楽コレクションは、江戸時代に岡山藩を治めた備前池田家で実際に用いられていたもので、その質の高さと規模は随一を誇ります。往時の大家家の能楽の在り様と歴史を今に伝える、たいへん稀有なコレクションです。本章では、国指定重要文化財の作品を中心に、桃山時代の能装束の精華をご覧ください。



重要文化財 能装束 紅白段枝垂桜模様摺箔
室町時代末～桃山時代・16世紀 林原美術館（前期展示）



重要文化財 能装束 雪持ち芦水鳥模様縫箔
桃山時代・16世紀 林原美術館（後期展示）

